

# 道元禪師頂相についての一考察

——面山瑞方ゆかりの木版「月見の像」——

伊藤良久

## 一 はじめに — 頂相とは —

頂相とは<sup>(1)</sup>、禪宗における祖師の肖像画のことで、多くは軸装されている。

頂相が作成された理由は、まず、師資相伝・伝法の証とするためである。師僧は弟子に対して、法を正しく嗣いだことを示す印可状として自賛の頂相を与え、受け取った弟子は、それを単なる肖像画ではなく師そのものとして崇め、常に師と共に生きるという心の拠り所として大切に護持するなど、頂相は師資相承を行う禪宗の普及と共に多く描かれた。生前に描かれた頂相を寿像と言う。ただ、今日では嗣法に伴う頂相授受はあまり行われていない。

次に、葬儀や年忌法要などの仏事に用いるためである。諸清規の規定では、高僧の葬儀（尊宿喪法）における掛真仏事においては、頂相を掛けることになっていた。また、開山の忌日に毎年行われる開山忌や、歴住の年忌においても、祖師の頂相が法堂に掛けられる。今日でも同様である。像主の没後に作成された頂相を遺像と言う。

本師の生前中は嗣法の証しとして護持し、本師が示寂すると葬儀やその後が続く諸法要において用いたというものがもともとの趣旨であったと思う。それが次第に、示寂した像主を追慕し顕彰するため、そして法要で用いるため

に示叙後に作成されるようになった。

ところで、曹洞宗文化財調査委員会では、曹洞宗の機関誌『曹洞宗報』において、平成十九年一月号より平成二十九年十二月号にいたる間の連載回数一三二回、その表紙に「洞門の祖師」と題して祖師方の頂相を紹介させて頂いた。<sup>2)</sup>

原則的には、一人の祖師については頂相一幅のみを掲載した。ただ、法嗣(弟子)の数も多いような著名な祖師になると、木版画などを含めると数多く残されているし、同じような構成で同じような自賛が付された頂相が、全国の離れた別々の寺院で所蔵されている事例もあった。このような場合には、像主(祖師)と頂相所蔵寺院との関係や、著賛された時の年齢等を勘案し一幅のみを選定した。

特に数多く現存しているのは道元禪師(一一二〇～一一五三。以下「道元」と略称)の頂相である。<sup>3)</sup> その頂相は、同一人物を描いたものなので、全て別々の図柄ではなく、類似するものも多く、いくつかの共通点を持つものがありある。ちなみに『曹洞宗報』の表紙で紹介することができたのは、平成十九年一月号の宝慶寺(福井県大野市宝慶寺)所蔵(以下、本頂相そのものを「宝慶寺頂相」、この頂相に類似した頂相を「宝慶寺型」と呼ぶ)と、平成三十年十二月号の大本山永平寺所蔵(以下、本頂相そのものを「永平寺頂相」、この頂相に類似した頂相を「永平寺型」と呼ぶ)の二幅で、いずれも自賛頂相である。現在、全国の宗門寺院に残されている道元の頂相の多くは、どちらかの系統に分類できるといふ。<sup>4)</sup> これまで曹洞宗文化財調査委員会によって調査された頂相を閲覧すると、顔の輪郭や表情、姿全体の構図を見ると、宝慶寺型か永平寺型の派生形という印象を受ける。

本論では宝慶寺型から展開した面山瑞方(一六八三～一七六九)ゆかりの頂相について考察する。なお、本稿は前稿「道元禪師頂相の展開——面山瑞方著賛「月見の像」を中心に——」(『曹洞宗総合研究センター第二十一回学

術大会紀要』令和二年）において掲載できなかった画像類を紹介し、さらにその後には得ることができた画像等を補足しながら検討を加えた継続研究である。

二 道元禪師の自賛頂相 — 「宝慶寺型」と「永平寺型」 —



【図1 福井県宝慶寺所蔵 道元禪師頂相】

先述したように、道元の主な自賛頂相には宝慶寺頂相と永平寺頂相の二本が存する。

この内、宝慶寺頂相（図1）は、道元の自筆の自賛を持ち、福井県指定文化財である。道元の頂相といえど誰しもが思い浮かべるほど曹洞宗でもっとも著名なものである。

ちなみに自賛は『永平広録』巻十の三自賛<sup>(5)</sup>であり、画賛と識語も含めて原文を上段、書き下しを下段に示せば次のようである。

気宇爽清山老秋、颯天井驢皓月浮、一無寄一不収、任騰騰粥足飯足、活鱗鱗正尾正頭、天上天下、雲自水由。建長己酉月円日、越前吉田郡吉田、祥山永平寺開闢沙門希玄白賛

気宇爽清なり山老ゆるの秋、天井を颯るに（驢）皓月浮かぶ、一も寄るなく一も収めず、任騰騰として粥足り飯足り、活鱗鱗として正尾正頭、天上天下、雲自水由なり。建長己酉月円日、越前吉田郡吉田、祥山永平寺開闢沙門希玄白賛

賛語に続く識語に「建長己酉月円日」（建長元年（一二四九）八月十五日）の語があることから、「月見の像」や「観月像」と呼ばれ、道元自身が著賛した現存最古の頂相とされている。<sup>(6)</sup>

宝慶寺頂相は、向かって右側を向いて曲糸に坐し、長い紐と環のついた黒袈裟を掛け、法界定印を組む半身像である。黒衣の襟元は大きくカットされ、胸元は広く開いている。顔の表情については、輪郭は頭頂が盛り上がり、頬骨は張っているがどちらかと言えは丸顔で、おとがいがやや上がり、肉厚の唇は上唇よりも下唇が大きく突き出している。二重まぶたの両目は下がり目だが目尻が少し上にはねており、眉毛は水平で、目尻は斜めである。また耳たぶは下に大きく垂れたいわゆる福耳である。

もう一つ、永平寺頂相<sup>(7)</sup>の自賛は『永平広録』巻十の十自賛である。しかし、この自賛には「道元自題」とはあるが、筆跡については宝慶寺頂相をはじめとする道元の真筆類とはかなり異なっているので、道元在世当時のもので

はないと考えられている。ただ、室町時代には作成されていたという。ちなみに、描かれた表情は宝慶寺頂相（「月見の像」）に似ており幾分若いとされている。こちらも道元の頂相としては宝慶寺頂相に次いで著名である。

永平寺頂相は、向かって右側を見て、黒衣に斑の袈裟を掛け、右手に扨子を持つて麻手の曲景に坐禅する全身像である。顔は面長で、口もとは小さく、紅い唇は上下とも同じような大きさである。

なお、この頂相にはいくつかの変更が加えられており、袈裟の環が塗りつぶされ、その痕跡ははっきりと分かる。また、自賛の言葉についても、文字の削除と加筆があるとされる。<sup>(8)</sup>確かに頂相をよく見ると、実際に三句目の「挙是」に続いて「○為非」の加筆があり、「侍真」の下には一文字分だけ違和感のある空間があり、まるで元々記されていた「矣」が後に削り取られたように見える。ここで、『永平広録』十自賛、永平寺所蔵頂相の画賛の現状と、卍山が校訂して出版した卍山版『永平広録』十自賛を三段に対照すると左記のようになる。

『永平広録』十自賛	現状の画賛	卍山版『永平広録』
認是為真（是れを認めて真と為ば） 真為甚是（真甚としてか是れなる） 挙是（是れを挙して） 為甚待真矣（甚としてか真を待たん） 恁麼見得（恁麼に見得すれば） 掛空何是身（空に掛くるも何ぞ是れ身ならん） 牆壁未全心（牆壁未だ全心にあらず） 道元自題	認是為真 真為甚是 挙是（○為非） 為甚待真（矣） 恁麼見得 掛空何是身 牆壁未全心 道元自題	認是為真 真為甚是 挙是為非（是れを挙して非となし） 為甚待真 恁麼見得 掛空何是身 牆壁未全心 道元自題

「面山瑞方は『建康普説』「第六永祖忌掛真普説」において、本頂相の画賛に対して「初め四言四句、次に四字傍句、後に五言二句、太だ読み易し」として、卍山の校訂を支持している。こうして見ると、現存する永平寺頂相は、卍山・面山の指摘を受けた後、賛語については加筆と削除が行われ、それからさらに時期は不明だが袈裟の環が黒く塗りつぶされたという、作成時の原画にいくつかの改変を加えた頂相と言うことができる。

ちなみに、この永平寺型については木版頂相がいくつか現存している。基本形は十自賛と坐像の組み合わせであるが、坐像は木版でありながら賛は卍山道白の肉筆であったり、同じく賛が面山瑞方の肉筆であったり、更には永平寺型の坐像に前述した宝慶寺頂相の三自賛（木版）を付して摺刷したものまで存在している。画賛と坐像の版木は別々に存在したのであるうか。ここでは、十自賛を持つ永平寺型の茨城県結城市結城の安穩寺所蔵の頂相を紹介する。賛は、「認是為真、真為甚是、拏是為甚待真矣。恁麼見得、掛空何是身、牆壁未全。道元自題」と、『永平広録』と同文であるから、卍山の修正や面山の指摘を受ける以前に板刻された版木から摺刷されたものである。



【図2 茨城県安穩寺所蔵  
道元禪師頂相】

以上、宝慶寺型と永平寺型の二種について紹介した。現存する道元の頂相は、この二種のいずれかに類似しており、その派生形とすることができると言える。

なお、總持寺祖院には『永平広録』六自贊<sup>13)</sup>を持つ頂相が存する。こちらの像容は、向かって右側を見て、黒衣に環のある斑の袈裟を掛け、右手に扠子を持つて藤手の曲糸に坐禅する全身像である。顔立ちには永平寺頂相に似ており、口もとの紅い唇は上下とも同じような大きさで、切れ長の目線はやや上を見ている。自贊は「喫来太白老拳頭、突出眼睛看斗牛、自被自瞞無覓处、老婆為汝尚油油。道元自贊（喫し来たる太白の老拳頭、眼睛を突出して斗牛を見る、自ら自瞞を被つて覓むるに処なし、老婆汝の為に尚お油油。道元自贊）」で、道元の筆跡とは異なるので、原本をいつ頃かは不明だが書写されたものと推測できる。その像容は、永平寺頂相に極めて類似する永平寺型である。本論で詳しく検討することはできないが、道元が著賛した原本を受け継いでいるものと考えられる。

### 三 宝慶寺型の展開 —— 面山瑞方による作成例 ——

宝慶寺頂相の特徴をほぼ正確に写しているのが、面山瑞方が著賛した月見の像である（以下「面山型」とする）。ちなみに面山瑞方（一六八三～一七六九）は、肥後に生まれて出家、江戸で卍山道白（一六三六～一七一五）、損翁宗益（一六四九～一七〇五）、徳翁良高（一六四九～一七〇九）らの教えを受け、後に損翁に従つて仙台におもむき、その印可を受け、後に諸方に招かれて講席を開き、建仁寺西来庵で示寂した江戸時代の宗学者である。『正法眼蔵』の註釈書である『正法眼蔵問解』をはじめ多数の書籍を著述しており、卍山等とともに曹洞宗の中興と仰がれている。面山の生涯の言葉を集録して集大成した『面山広録』<sup>14)</sup>の巻十六「永平高祖」や『面山逸録』<sup>15)</sup>の巻二「永祖贊」には、道元の頂相に面山が揮毫した賛語が数え切れないほど収録されている（およそ五六〇程度）。面山に関わる現

存する頂相は宝慶寺型のみではないが、道元の示寂後凡そ四百五十年を経て、賛語の数だけ数多くの頂相が面山によって作成されたことが窺える。

面山型で、現時点で所在を確認できるのは五点で、著賛された年代順に並べると左記のようになる。ちなみに、面山型は面山が模写して著賛した頂相と理解されることが多い。

いくつか例示すれば『曹洞宗文化財目録解題集八』に収録された妙昌寺資料の〈絵画〉11道元禪師頂相（次頁の①）について、次のような解題がなされている。

福井県大野市の宝慶寺に所蔵される道元禪師画像（月見の像）を面山瑞方（一六八三～一七六九）が模写し、画面の上部に賛を揮毫したもの。賛には「丙辰之秋」の年号表記があり、元文元年（一七三六）の作と推定される。面山自筆の賛と朱印が押されている作品は貴重（六七九頁）。

また、面山瑞方ゆかりの遺品を多数収録する『永福面山禪師宝物集』に掲載された面山型頂相（次々頁の②）については、次のような解題がある。

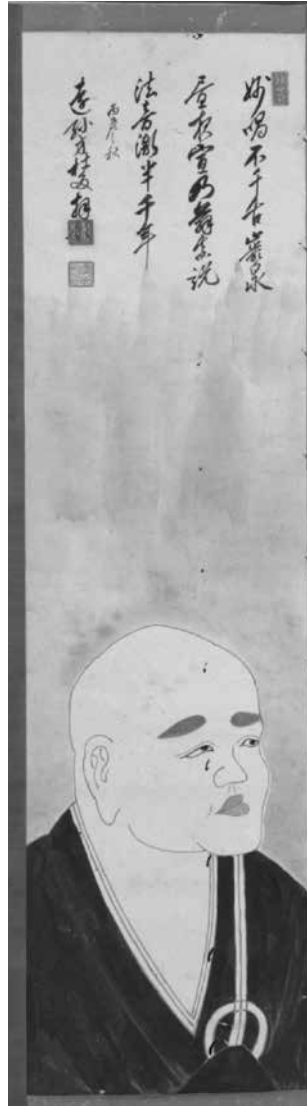
#### 18 道元禪師頂相賛

面山禪師ご自身の筆になる道元禪師の頂相と賛。画は宝慶寺蔵のいわゆる月見御影に模して画いたもので、次項以下二点の資料と類似する。この賛は『面山逸録』巻二「永祖賛」に収録されているが、本資料に見える識語を欠いている（一五七頁、以下略）。



右記の傍線部を見ると、やはり面山が模写して著賛したものと解題されている。恐らくこれが面山型に対する近  
来の評価と思われる。次項以降一つ一つの確認を行なう。

① 愛知県妙昌寺所蔵（一七三六年作成）<sup>17</sup>



【図3 愛知県妙昌寺所蔵  
道元禪師頂相】

画賛と識語の原文を上段に、書き下しを下段に示せば次のようである。

妙唱不千舌、巖泉昼夜宣、乃翁真說法、  
音激半千年。

妙唱、千舌にあらざるも、巖泉は昼夜に宣す。乃翁の真說法、  
音激なること半千年。

丙辰之秋、遠孫方杜多拝題

丙辰之秋、遠孫方杜多拝題

識語を見れば丙辰（元文元年（一七三六））に作成された頂相である。軸裏に「宝慶寺什物、宗祖自画自賛、若狭空印寺□祖面山拜写」とある。これによれば、宝慶寺に収蔵された道元の自画自賛の頂相（宝慶寺頂相）を空印寺（福井県小浜市小浜）十四世の面山が書写して作成した頂相ということになる。

② 愛知県東漸寺所蔵（一七三七年作成）

画賛と識語の原文を上段に、書き下しを下段に示せば次のようである。

<p>吉祥山上吉祥人、写出本来面目新、 唯願遠孫蒙法力、正伝三昧再回春。 丁巳之夏、遠孫若溪方杜多拜画并賛</p>	<p>吉祥山上吉祥の人、写出して本来面目新なり、 唯だ願はくは、遠孫法力を蒙つて、正伝の三昧再び春回らん。 丁巳之夏、遠孫若溪方杜多拜画並びに賛</p>
---	--

一 識語によれば丁巳（元文二年（一七三七））に作成された頂相である。この年、東漸寺（愛知県豊川市伊奈町）十六世瑛石覚仙（一六六六―一七五〇）は空印寺での助化師となっているので、その折に面山から与えられたものと考えられている。<sup>(20)</sup>

③ 石川県總持寺祖院所蔵（一七四四年作成）



【図4 石川県總持寺祖院所蔵 道元禅師頂相】

画賛と識語の原文を上段に、書き下しを下段に示せば次のようである。

日本仏嫡、肩荷竺支。今晨降誕、吉祥祖師。平満之祖如字之卍、垂堅之眼似点之伊。道力強兮六牙白象、法威熾兮一吼金獅。証上有修修上証、梅花開雪玉聯枝。寛保甲子年正月二日、遠孫瑞方拝画題

日本の仏嫡、肩に竺支を荷う。今晨降誕す、吉祥の祖師。平満の祖字の卍の如く、垂堅の眼点の伊に似たり。道力強し、六牙の白象、法威熾なり一吼の金獅。証上修有り修上の証、梅花雪に開いて玉枝に聯なる。寛保甲子年正月二日、遠孫瑞方拝画題

識語によれば、寛保甲子（四）年（一七四四）正月二日、高祖降誕会（道元生誕の法要）時に著賛されたものであろう。なお、本画像も面山型ではあるが、他の四点と比較すると頬骨の張りや頭頂の盛り上がりが少く、彫りの浅い顔立ちとなっている。

④ 栃木県長林寺所蔵（一七四四年作成）<sup>(23)</sup>



【図5 栃木県長林寺所蔵  
道元禅師頂相】

画賛と識語の原文を上段に、書き下しを下段に示せば次のようである。

<p>鼻直眼横、通身光明。蹟赫乎仏祖玄要、開道乎人天夷庚。竺支桑之禪教專補闕、去來今之修証如奉盈。仰処雖高水涵影、越山千丈月華清。延享甲子孟冬十三日、遠孫若州無量壽山頭陀、面山瑞方拝画并賛</p>	<p>鼻直眼横、通身の光明、仏祖の玄要を蹟赫して、人天の夷庚を開道す。竺支桑の禪教、専ら闕を補い、去來今の修証、奉盈るを奉ぐるが如くす。仰処、高しと雖も水影を涵し、越山、千丈の月華清し。 延享甲子孟冬十三日、遠孫若州無量壽山頭陀、面山瑞方拝画并賛</p>
--	---

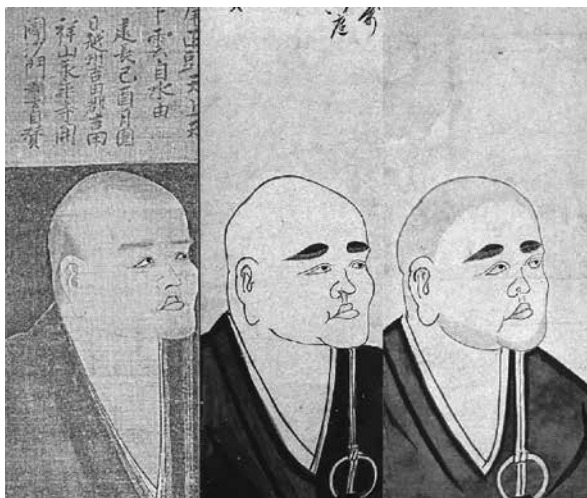
識語によれば、延享甲子（元）年（一七四四）孟冬（十月）十三日の作成である。軸裏には「高祖之尊像、面山筆」と記されている。

⑤ 滋賀県洞壽院所蔵（一七四六年作成）



【図6 滋賀県洞壽院所蔵 道元禪師頂相】

画賛と識語の原文<sup>(26)</sup>を上段に、書き下しを下段に示せば次のようである。



【図7 宝慶寺・洞壽院・總持寺祖院 道元禪師頂相の比較】

画贊の署名を見るまでもなく、明らかに同一人物（面山）が関わった作例だと分かる。顔立ちだけを見れば、③は若干輪郭が異なるようにも見えるが同系統であり、③以外の四点は全く同じ画像と言っていい程である。図7は、右から③總持寺祖院、

②宝慶寺頂相（「月見の像」を模写して描き、画面の上部に面山が賛を揮毫したという解釈である。面山自らも識語には「拝画并に賛」もしくは「拝題」などと記している。つまり、上記

五点は、面山が描いて著賛した頂相ということになる。実際に、これら五点を比較すると画像は非常によく似ている。

鼻筒清蓼蓼、眼孔明歴歴、当仁也円頓半満、八万余蔵之住持、拔群也西天東地、五十一代之法嫡、門庭施設兮月白風高、家常澹泊兮山青水碧。  
丙寅七月二十八日  
遠孫若之無量寿山沙門面山瑞方拝画并賛

鼻筒清蓼蓼、眼孔明歴歴、仁に当るや円頓半満、八万余蔵の住持、群を抜くや西天東地、五十一代の法嫡、門庭の施設、月白く風高し、家常の澹泊、山青く水碧なり。  
丙寅七月二十八日  
遠孫若之無量寿山沙門面山瑞方拝画並びに賛

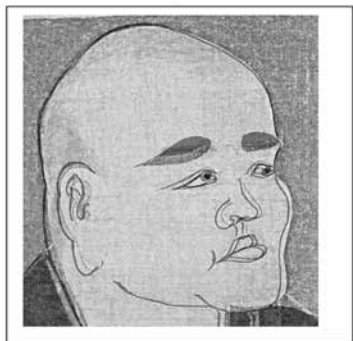
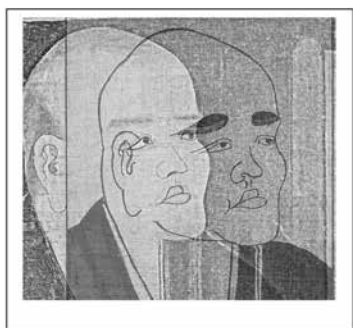
⑤洞壽院、そして宝慶寺頂相（月見の像）を横に並べたものである。やはりよく似ている。

ここで、宝慶寺頂相と「面山型」（⑤洞壽院）について特に面貌のみを重ね合わせたものが図8である。

上段のように少し近づけ重ねはじめると、下段のようについには重なり合ってしまう。輪郭をはじめ、二重まぶたの両目の傾き具合、耳たぶや耳孔など耳介の描写、鼻筋や小鼻の角度、口角のしわ、特徴のある上下の唇は、ぴったりと合致する。黒衣や黒袈裟については環や紐は酷似しているが、しかし紙面に収める必要性からだろうか、面山型の法服は縦方向に全体的に少し圧縮されているようだ。

面山型が原本と全く違うのは眉毛である。原本は水平で細いが、面山型はしずく型でボリュームがある。また細かい彩色の相違点として、面山型の両目の目尻と目頭には朱が差してあるように見える。面山にはそのように見えたのであろう。ただこれは全体的に見れば些細な違いである。

共通点の方が多いのであるが、よく目立つ眉毛の形が大きく違うと、原本と面山型の道元はどこなく別人のよ



【図8 宝慶寺頂相・面山型  
道元禅師頂相の類似性】

うな印象さえ受けてしまう。しかし、じっくりと比較すると、やはり二つはほぼ合同である。宝慶寺頂相の原本と面山型の現物二種を並べたことはないが、もしも面山型の大きさが原寸大であれば、面山が原本に薄紙を重ねて透写（トレース）したという可能性もでてくる。

#### 四 面山瑞方による透写と版木の存在

『面山広録』巻二十六に収録された面山の年譜を見てみたい。<sup>(28)</sup>

(正徳四年)

七月赴加州。九月至總持、值峨山禪師三百五十年法会。此冬在大乗勤祖堂侍真。

正徳五年乙未

師三十三歳。二月出加州、登永平、到傘松峰、見血脈池。又登宝慶寺、拜永祖自贊画像。主人龍堂力生寵待太渥、留宿五日。約再訪、三月還鷹峰。

右は正徳四（一七一四）年秋以降の記事であり、面山三十二〜三十三歳の出来事である。この年、總持寺二祖峨山韶碩（一三六五もしくは一三六六年示寂）の三百五十回大遠忌に相当したので随喜し、その後は大乗寺の侍真を勤めたという。翌（一七一五）年二月には、永平寺に続いて、そして宝慶寺に拝登したとする。この時、面山は当時の宝慶寺三十世龍堂即門（一七二一寂<sup>(29)</sup>）からの寵遇を受け、永祖自贊画像（「月見の像」であろう）を見ることのできたという。そこで五日間留まって、再び訪れることを約束して、三月には源光庵（京都市北区鷹峯）に帰寺

したと記されている。

面山は宝慶寺に五日間留まって月見の像を拝しているが、この時に画像を透写したのではないだろうか。面山型の作例で最も早いのは①妙昌寺蔵（一七三六年著賛）であるから、宝慶寺の拝登後二十年ほど経過している。年代的に見ても、透写画をもとに作成したと考えても差し支えはない。

透写画をもとに作成したとしても、現存する面山型①～⑤とあまりによく似ている。当初、面山が透写画の一枚を原本として、それをさらに透写して複製し、沢山の頂相を作成したと考えていた。しかし、実は面山型の版木が現存しているというのである。このことを指摘する大久保道舟『道元禅師伝の研究』を引用すれば次のようである。

なお最後に特に附記しておきたいことは、版画の原版の伝わっていることである。それは秋田市萬雄寺に蔵するもので、係賛はないが、幅本仕立にできる程度の大きさの素像が彫刻されている（縦六〇・八、横二九・五、厚三・二センチ）。面貌姿態は、前掲寶慶寺の「月見の画像」を模写したもので、年代も古く且つ芸術的にもすぐれた逸品である。このような禅師の肖像版画の原版の伝わったことは、まことに珍しいことで、特に越前の辺陲寶慶寺の画像が、早く東北地方にまで知られ、版画に仕立られたという点に、この原版の史的価値は高いといわねばならぬ。今ここに掲載した写真は、去る昭和二十八年、禅師の七百年大遠忌の年頭にあたって、故伊藤高順氏（秋田県長谷寺住職）が、勝平得之氏を煩わして摺刷頒布したものである。<sup>30)</sup>

この記載によれば、版木を所蔵しているのは萬雄寺ばんのうじ（秋田市榎山金照町）で、「月見の像」を模写したもので賛はなく肖像部分のみであるという。ここで、大坂高昭『秋田県曹洞宗寺伝大要』に紹介された萬雄寺の寺誌には次



のように記述されている。<sup>⑳</sup>

一方、この寺の歴住には名僧も多く、特に十二世唯巖殊心大和尚は『正法眼蔵』の泰斗・面山瑞芳<sup>㉑</sup>禪師について参学し、高祖道元禪師のご真筆を賜った名僧として知られている。

〔寺宝・文化財〕

○涅槃図：説明文は省略

○道元禪師肖像木版：道元禪師「月見の図」として知られる肖像と同じ版木。由来、経路不明であり今後の究明が待たれる貴重な版木。

○九頭竜水墨画：説明文は省略

傍線部のように、萬雄寺には「道元禪師肖像木版」（「月見の図」の版木）が所蔵されているというのである。なお同寺の歴代住持には名僧が多く、特に十二世唯巖殊心は面山のもとで参学し、道元の真筆を賜ったという伝承があるという。ちなみに唯巖殊心については、『大系譜』中にその名は見えず、残念ながら面山の法嗣達の中にも類似した僧名は存在せず、生没年をはじめ詳細な伝記は未詳である。しかし、面山に参学し真筆<sup>㉒</sup>を賜ったほどの名僧であるので、宝慶寺型の版木の伝授がなされてもおかしくはない。

恐らく、面山は宝慶寺に拝登して透写し、帰寺した後で折を見て、透写した図を原本として版木を板刻したと考えられる。面山型①～⑤の原寸は確認できないが、版木の大きさは縦約六十cm、横約三十cmであったので、軸装<sup>㉓</sup>の画像部分とほぼ同程度と推定される。

その後、萬雄寺に拝登し調査を行ったところ、『秋田県曹洞宗寺伝大要』<sup>(3)</sup>に紹介された「道元禪師肖像版本」が現存していた(図9)。採寸したところ『道元禪師伝の研究』に記載された版本に相違ない。また、版本から摺刷し軸装された紙本で無彩色の頂相も所蔵されていた(図10)。頂相の軸裏に「七百年忌、永平道元古仏画像、萬雄寺蔵版」とあることから、道元禪師七百回大遠忌<sup>(4)</sup>(昭和二十七年(一九五二))に合わせて作成されたものと分かる。恐らくは、遠忌に際して萬雄寺ゆかりの人々に頒布されたのであろう。



【図9 秋田県萬雄寺所蔵  
道元禪師肖像版本  
(下段は左右反転の画像)】



【図10 秋田県萬雄寺所蔵  
道元禪師頂相】

『秋田県曹洞宗寺伝大要』には先述のように、版本の「経路不明であり今後の究明が待たれる」という問題提起

がある。これについては、これまでの考察から次のように推測したい。

面山は、正徳五（一七一五）年の春、宝慶寺に拝登した際に「月見の像」を透写し、帰寺<sup>36</sup>してその画像を元に版木を板刻した。その版木からは沢山の面山型頂相が摺刷され、画像の上段には面山によって賛語が揮毫された。版木については、面山より門人の唯巖殊心に譲り渡され、唯巖の住職地である萬雄寺に所蔵されることになったのである。これが現存する版木の経路である。

萬雄寺所蔵頂相（図10）は七百回遠忌時に作成された凡そ七十年前のものである。画像は、面山在世中のもの（面山型①～⑤）と全く同じであるため新旧の時代隔たりは感じられない。ただ、両者の間には二百年以上の歲月が流れているのである。今後もこの版木を用いて摺刷が行われれば、面山在世当時と同じ頂相を複製することができるのである。

## 五 おわりに

本論では「道元禪師頂相」の中でも宝慶寺型の派生形である面山型五種について検討した。これらは、道元の示寂後四百年以上を経て、面山が宝慶寺頂相「月見の像」を透写して板刻し作成したものと考えられる。よって、検討した面山型五種（特に①②④⑤）は、面山が一枚一枚描いたものではなく、面山が作成した版木から摺刷して着色し、上部に面山が著賛したものである。

頂相の原本については、派頭の所蔵寺院に拝登しなければ見ることはできない。嗣法の意味を持つものであれば人目に付かず秘蔵されていることもあるだろう。それを写した複製物は閲覧困難な地域の宗侶や人々に対して、祖師忌等を通して、親しく祖師の面影に触れる機会を作ることができた貴重な頂相だったに違いない。

『面山広録』や『面山逸録』にはおびただしい数の「道元禪師頂相」に書かれた面賛が収録されている。それを見ると、面山ゆかりの頂相が数多く作成され、全国各地に頒布され展開したことが想像される。面山型を通して各地域の宗侶達や檀信徒達に道元の面影が伝えられたことと思う。

調査を行うと、本稿で考察した道元の事例以外にも、後代に筆写されたものや木版画の頂相が多数残されている。オリジナルの頂相原本が重宝されるのはもちろんであるが、原本が現存しないことも多く、木版などの複製物が唯一無二の頂相ということもある。また、原本が現存しても、原本は最も古い作例であるため破損も多く、一部が欠損している場合もある。しかし原本が破損する前に作成された複製物によって、原本の欠損部分を補完できる場合もある。また改変が加えられた場合も、改変前の姿を知ることができる。そのように考えると、木版等の複製された頂相は再評価されるべきであると思う。

本論では、永平寺型の頂相にも触れたが、原本やその派生形について詳述することはできなかった。安穩寺以外にも数多くの永平寺型木版頂相が現存している。また、像谷が宝慶寺頂相に類似して道元帰朝直後の姿を描いたとされる日蓮宗本妙寺（熊本市西区花園）所蔵の頂相<sup>〔註〕</sup>が存在している。これは宝慶寺頂相（月見の像）と比較すると幾分若い表情の描写とされるが、両者には共通点も多い。何より二つを重ね合わせて見ると道元の面貌はぴったりと一致し、輪郭については全く同じなのである。この他にも、總持寺祖院が所蔵する『永平広録』六自賛をもつ頂相等々、道元の頂相は多数存在している。今後検討を加えたいと思う。

## 註

〔1〕拙稿「瑩山禪師の自賛頂相―曹洞宗における頂相との比較を通して―」（『仏教経済研究』四十八号）にて頂相作成の理由、

頂相の特徴、時代的な変容について考察した。

(2) 連載一三二回、二一九名の祖師については「洞門の祖師(表紙解説) 一二年の軌跡」(『曹洞宗報』平成二十九年十二月号)において紹介した。

(3) 『曹洞宗文化財調査目録解題集』全八巻(曹洞宗事務庁、以下『解題集』と省略して巻数を示す)によれば、両祖の頂相は道元禪師が六十本以上、瑩山禪師も十数本程度確認できる。

(4) 『永平正法眼蔵蒐書大成別巻』「道元禪師真蹟関係資料集」(大修館書店、一九八〇年、以下『真蹟関係資料集』と省略)一〇〇九頁によれば、おおよそ道元禪師の画像は、「宝慶寺月見像系」(月見ノ御影軸系)と「永平寺倚座像系」(倚座ノ御影軸系)に分けられるとする。

(5) 『道元禪師全集四』(春秋社、一九八八年)二四八頁。

(6) 『曹洞宗報』平成十九年一月号、高橋秀榮氏解説参照。『永平広録』所収の自賛と頂相の賛は文字が異なっている。頂相の賛は、「氣宇爽清山老秋、颯天井(驢)皓月浮、一無寄六不収、任騰騰粥足飯足、活鱗鱗正尾止頭、天上天下、雲白水田」で、「驢」は「皓」の右に小字で添えてあり衍字であろう。また、「二不収」は「六不収」である。

(7) 『道元禪師全集四』二五〇頁。

(8) 『曹洞宗報』平成二十九年十二月号、廣瀬良弘氏解説参照。

(9) 廣瀬良弘「永平寺蔵道元禪師頂相について」(『傘松』平成三十一年一月号)参照。『建康普説』「第六永祖忌掛真普説」は「統曹全」(『語録二』五一頁)。

(10) 京都源光庵資料(絵画)17「道元禪師頂相」は永平寺型の木版に卍山道白の賛を付す(『曹洞宗報』令和二年一月号「文化財調査委員会調査目録及び解題」)。

(11) 『永福面山禪師宝物集』(永福会、平成二十年、以下『宝物集』と省略)一五六頁、15道元禪師頂相賛。

(12) 大久保道舟『道元禪師伝の研究』(昭和六十三年、名著普及会復刊)三九七〜四〇一頁。

(13) 『道元禪師全集四』(春秋社、一九八八年)二五〇頁。

(14) 『面山広録』(『曹全』「語録三」、以下『面山広録』と省略)六〇三〜八頁。「永平高祖」には四十三の画賛を収録している。

(15) 『面山逸録』(『統曹全』「語録二」、以下『面山逸録』と省略)五五一〜七一頁。巻二全体で四十三紙ある中の第五紙の「永祖賛」から第三十八紙の「永祖翫月賛」にいたる三十四紙が、道元の頂相に対する画賛である。「永祖賛」には五一六、「永祖翫月像」が一、「永祖翫月像」が二の計五一九の画賛を収録している。

(16) 『宝物集』一五六〜一五八頁には、面山が著賛した六点(15)20道元禪師頂相賛)の頂相が紹介されている。この内、宝

- 慶寺型は18、20の三点。他の三点は別系統で、特に15道元禪師頂相賛は永平寺型の木版画像に面山が賛を付した軸装の頂相。
- (17) 『解題集八』六七九頁の妙昌寺資料〈絵画〉11道元禪師頂相として立項。ちなみに『面山広録』や『面山逸録』にはこの面賛は収録されていない。
- (18) 『真蹟関係資料集』一〇〇七頁、図七四。『宝物集』一五七頁、18道元禪師頂相。
- (19) 『面山逸録』五六三頁b。
- (20) 『宝物集』解題一五七頁、左記の傍線部より。
- 面山禪師ご自身の筆になる道元禪師の頂相と賛。画は宝慶寺蔵のいわゆる月見御影に模して画いたもので、次項以下二点の資料と類似する。この賛は『面山逸録』巻二「永祖賛」に収録されているが、本資料に見える識語を欠いている。賛文と識語は「吉祥山上吉祥人、写出本来面目新。唯願遠孫蒙法力、正伝三昧再回春。丁巳之夏 遠孫若深方杜多拜画并賛」とあり、元文二年（一七三七）、面山禪師五十五歳の時のものと思われる。なおこの年、東漸寺の瑛石覚仙（一六六六～一七五〇）は、空印寺結制において助化師となっている。あるいはその折に与えられたものであろうか。
- (21) 『解題集七』の總持寺祖院資料〈絵画〉12道元禪師頂相として立項。『宝物集』一五八頁19道元禪師頂相。
- (22) 『面山広録』六〇四頁a。『宝物集』一五八頁の解題には次のようであり、本頂相の来歴が伺える。「寛保四年（一七四四）に、高祖降誕会に因んで制作された画・賛で、ともに面山禪師筆。賛文は『面山広録』巻十六に収録される。この画も宝慶寺蔵の月見御影に模したものの。昭和三十九年八月、山上嘉久氏より寄進された旨が箱書きにみえる。」ちなみに、現在の高祖降誕会は一月二十六日（陰暦では一月二日）に修行されている。
- (23) 『解題集六』長林寺資料〈絵画〉8道元禪師頂相として立項。『宝物集』一五八頁、20道元禪師頂相。
- (24) 『面山逸録』二（続曹全）「語録二」五七〇a。ちなみに『宝物集』一五八頁解題では、「延享元年（一七四四）、に作成された画・賛で、画・賛ともに面山禪師筆。この画も宝慶寺所蔵の月見御影を模したものの」として、さらに「賛は『面山逸録』巻二「与鼎牛禪人」の一部と一致するが本資料に見られる識語を欠く」と指摘されている。ただ「与鼎牛禪人」は本頂相とは別の賛語。
- (25) 『解題集五』洞寿院資料〈絵画〉20道元禪師頂相として立項。解題中に「面山瑞方面・賛。月見の像の模写」とあり、やはり面山の模写とする。
- (26) 『面山広録』六〇五頁a。
- (27) 『解題集』や『宝物集』の解説など。
- (28) 『曹全』「語録三」八二五頁a。佐藤秀孝「永福開山面山瑞方禪師年譜」（『面山瑞方禪師二百二十回小遠忌紀要』永福会、

一九八九年）四五頁b。

(29) 河原哲郎・森孝嗣『修行の寺宝慶寺』（宝慶寺、一九八七年）一四頁参照。

(30) 大久保道舟『道元禅師伝の研究』（昭和六三年、名著普及会復刊）四〇一～四〇三頁。特に四〇二頁の図三七は現存する版木からの摺刷した版画。

(31) 大坂高昭『秋田県曹洞宗寺伝大要』（無明舎、一九九六年）七六～七七頁参照。

(32) 『真蹟関係資料集』には萬雄寺所蔵の真蹟は収録されていない。ここでの真筆というのは「月見の像」版木のことかもしれない。

(33) 現物を採寸した際は、縦六〇・三センチ、横三〇センチ、厚さ三・三センチ。大久保道舟前掲書四〇一頁とほぼ同寸。

(34) 令和二年二月十四日、萬雄寺様に拝登し、ご厚意により版木及び頂相を拝謁し写真撮影させて頂いた。

(35) 大久保前掲書には昭和二十八年に摺刷頒布されたところがあるが、七百回大遠忌（昭和二十七年（一九五二））に合わせて印刷や表具が始められ、その翌年に頒布されたと考えられる。

(36) 宝慶寺から帰寺したのは京都源光庵である。ちなみに、曹洞宗文化財調査委員会では、平成二十三年に源光庵において文化財調査を行った。その際、源光庵山内に『江山広録』版木が保管されているのを目の当たりにし、その数の多さに圧倒された。源光庵等では版木の作成や保管がしばしば行われていたのであろう。

(37) 佐藤秀孝「熊本市本妙寺所蔵『道元禅師頂相』―帰国当初に描かれた道元禅師の姿を偲んで―」（『駒澤大学禅文化歴史博物館紀要二』二〇一八年）は本頂相に関する詳細な研究。

付記

福井県寶慶寺様、茨城県安穩寺様、愛知県妙昌寺様、石川県總持寺祖院様、栃木県長林寺様、滋賀県洞壽院様には、曹洞宗文化財調査委員会の撮影資料を使用して頂くにあたって資料掲載についてのご許可を賜りました。また、秋田県萬雄寺様には突然の拝登にもかかわらず快く版木及び頂相を紹介して頂きました。誠にありがとうございました。